<EKUTEBIAN VOL.7 DECEMBER 1990-EKUTEBIAN>

まい　あーと■押花
「パラソル」 by 吉田英子

ゆめを撞(つ)くひと

今年から来年へ「希(ねが)い」をわたす除夜の鐘は、立川人にとってはまた格別な意味があろう。市制五十年を喜びのうちに迎えた私たちが次の大きな節目の「市制百年」にかける夢もまた、大きい。「豊かな立川」への限りない希いを込めて撞く人びとの笑顔は、すがすがしい空気を醸し出して、鐘の音は天を駆けて響いてゆく。

『ベスト立川人・展』——正月13日から開催——

〜於・ウィルギャラリー（7F）　1月13〜20日（17日休館）〜

一年を通して立川の「喜びの総決算」と云われるこの写真展。今回は新しい試みとして、新年をむかえてからの開催となった。各カメラマンの活躍によって、その準備は着々とすすめられ、開幕を待っている。

年末の恒例となっていた「ベスト立川人・展」だが、今回は新しい試みとして新年の開催となった。つまり、マルマル1990年。一年を顧みて「ああ、こんな人もいた」「あの人が優勝した時の笑顔が忘れられない」と、各方面から聞こえてくる声を集大成して写真展としたのが、この「ベスト立川人・展」だ。

すでに大方の候補者の撮影は終了しており、準備は着々と進められている。写真展だけに、作品の真価が問われるところだが、今回もまた粒ぞろいのカメラマンが腕によりをかけて、作品の深度を競っている。

本誌でおなじみの天野武男氏、板橋一明氏、吉田義治氏のほか例年の井沢巧氏、枝川一巳氏、小林洋治氏、武田和紀氏、中村伸氏、さらには今回新しく五来孝平氏、長坂洋平氏が加わりそれぞれの特性を競いながら作品完成を急いでいるところだ。

登場者も長年の功績をすらりと表現する方（谷川水車氏、荒井一氏）、それとは対比的に結成間もない小学生の卓球チームが全国大会出場をはたす（立川ドリーム）など、若い力がうれしい活躍をしてくれた一年でもあった。

「文学界」新人賞に輝き、芥川賞候補にもなった河林満氏は、立川の文学上もっとも嬉しいニュースであった。また、異色なところでは「魚料理日本一」になったグルメ夫人の江本佳寧子さんの存在も忘れられない。

立川文化に多大の貢献をした、今は亡き中野藤吾氏、児玉勝己氏らを遺影で忍ぶコーナーも設けられ、1月13日に「ベスト立川人・展」は華やかにオープンされようとしている。

河林　満さん㊧（高松町）
高松児童館に勤務の傍ら、執筆活動。今年、「渇水」で文学界新人賞を受賞。

江本佳寧子さん㊧（若葉町）　おさかな料理で「日本一」に。
荒井　一さん㊧（上砂町）　長年「伝承民話」保存に尽す。

ぐるり立川⑨

雨の中を西に向って車を走らせた。暗きょ化され、どこもかしこも舗装された道は、そのせいかちょっと雨が降りしきると行き場がなくあふれ返る。それをそのまま走らせる。道路の端を歩く人は、車がはねあげた水で服の裾を汚すだろう。靴にもろにかかってどんなにいやな思いをするだろうか。

今年の秋は雨が多かった。五日市街道の両側の木々も雨にうたれて一層重く傾ぐかのようだ。五日市街道を国分寺方面から若葉町へ。手打ちうどんの店やファミリーレストラン、スーパーマーケット、いずれもどこの通りにもあるような店だ。だが、民家が違う。

今の土地高騰をみていると三〇坪もあれば十分、一戸建てが立つ。いや、二〇坪だって十分だ。畳一枚の土地をめぐって血眼になる。そんな私達を悠然と包み込む。そんな旧家がそして敷地にすれば、さあ、何坪ぐらいあるだろうか。堂々たる構えの家が、道路沿いに何軒もある。まさしく、ここは街道なのか。旅人が行き交い、荷車が通り、牛や馬も通ったのだろう。信号を待つこともなく、舗装された道路もない。やがて、人が生まれ人が死に子に引きつがれ、孫の代に替わる。新しい生命がそしてまた、街道沿いにたたずむ。家々を包みこむように。

（東畠弘子・この項おわり）

ことわざ問答⑨

▼漢字一字挿入せよ

意見と●は　つく程ねれる

わが身の事は　●に問え

12月1日〜7日
「市制50周年記念週間」
会場：市民会館
詳しくは☎(23)2111 内265までどうぞ

表紙は語る

まい　あーと■押花
「パラソル」by 吉田英子

靴の音も先月より高らかに舞っている様に聞こえる。もう極月であります。月の極み、これ以上の月がないのを知ってか慌しく、特に気忙しさだけは誰もが共通のものらしい昨今。

さて、そんな気忙しい月に優しく表紙を飾ってくださったのは、羽衣町2丁目にお住まいの吉田英子さん。花びら一枚一枚を丁寧に乾燥させ、おもいおもいの色を組合わせながら作られた押花。「この作品は私がはじめて手掛けた押花なんです。イメージが、とか、どんな感じで、とか聞かれてもよく自分でもわからないうちに出来ちゃった作品。もう手が震えっぱなしでした。でもいまは少しずつ楽しさが分ってきました。また、地元でやる文化祭は、とても作品向上につながっていますし、制作意欲の糧になっていますね」と自分の趣味だけでなく、自然に地域文化への参加といった、地域への熱い"思い"を感じた。来年2月頃、羽衣町では文化祭が行われる予定。

立川・トピックス

歩いてふれあい 立川ウォークラリー大会

秋晴れの10月21日、第5回立川ウォークラリー大会が開かれた。

立川レクリエーション研究会主催、市教育委員会後援によるもので、もうすっかり市民に定着、幼児からお年寄りまで、この日を心待ちの約70名が参加した。

午前10時15分、諏訪の森公園を出発。「歴史探訪コース」「小さな秋みつけた」の2コースに分れ、それぞれ途中のチェックポイントで"立川の歴史クイズ"や"俳句作り"などの課題に挑戦しながらゴールの歴史民俗資料館へ。街の再発見、地元の人との思わぬふれあい、など"秋の収穫"を楽しんだ。

Pick-up　手作りのクリスマス!!

さて、いよいよ今年もクリスマスシーズンの到来です。クリスマスといえば、キリストの降誕祭。もと太陽の新生を祝う「冬至の祭」が、キリスト教化されたものだそうです。

さて、楽しみなクリスマスプレゼント、何かしら手をかけて、とお考えになっている方もいらっしゃるでしょう。そこで、えくてびあんでは、立川にあるラッピングのお店を紹介します。富士見町2丁目にあるこのお店の名前は"MoGa"。品物を持っていけば、好きなように、ラッピングをしてくれます。ここでは、自分の好きなようにつくれる手作りのリースや、クリスマスツリー用の材料も手に入ります。

立川の高島屋の、5Fにある、ラッピングコーナーも見逃がせない。是非たちよってみてはいかがでしょうか。

真如苑だより

例年どおり、真如苑では立川の皆さまに清々しい新年を迎えていただけますよう、大晦日には境内参拝の用意をいたしております。どうぞ、お出掛けください（十時〜一時）。また、「除夜の鐘」を撞くことをご希望の方は当日、係りの者にお申し出ください。なお人数には制限がありますので、ご了承くださいませ。

●

■日時　12月15日㈯　午後2時〜4時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■立川市民(成人)に限らせて頂きます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」(本誌を手渡してくれた人）へ。

師走の慌ただしいこの頃ですが今月も、こころ静かなひと時を真如苑でおすごしください。

◆

ことわざ問答　答

意見と餅は　つく程ねれる

餅はつく程あじがよく、人の意見もそれに付く（従う）ほど得がある。意見三両堪忍五両。

わが身の事は　人に問え

自分の欠点は自分ではなかなか気がつかないものだから、他人に尋ねよ。息の臭きは主しらず。

東風

正月がある「大いさ」をもたなくなったのは、多分「満」で歳を数えるようになってからであろう。「数え」でないとどうも、一里塚のイメージがわかない。落語「芝浜」は歳の瀬の張りつめた空気を伝えて余すところがない。まだ、東京に海があったころの噺だ◆それでもまだ、除夜の鐘に私たちは幾許かの希いをこめて、それを撞く。世の中がかわったと、よく云われるが変わらないものがある。人はいつの時代にも「明日の光」がもっと強かれと希ってきた。表現方法に変化はあっても、その芯に在るものは変わらないであろう◆立川は市制五十年ということで、今年はおおいに賑わった。行事も格別に盛りあがりようだ。その中に人はすでに「百年」を見通しているのであろう。五十年という歳月は長い。ひと昔まえなら、人間の一生分である。その頃、自分の代はもう終っていることであろう。◆五十年後の立川に、私たちは何を希うのであろうか。「繁栄」というような枠組ではとても括れない、もっとヒューマンなものを求めていることであろう。そして、われらが「えくてびあん」のヒューマンタッチもまた、色濃く時代を映しているであろうか。立川人の思いよ百年へ翔べ！と叫びたい。今年の除夜の鐘はなにか特別な響きをもっているような気がする◆えくてびあん 空青き年 惜しみけり。

（編集）小川和子　神山清子　隅川環　山田恵子　中村総恵　笹井正弘　原田悦子　馬場真木子
（写真）天野武男　板橋一明　吉田義治　スタジオ269　枝川一巳　本多修

月刊えくてびあん　第77号
平成二年十二月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市富士見町2-20-15 パークビューハイツ501 〒190
電話　〇四二五(28)〇〇八二
FAX　〇四二五(28)一二九七
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　㈱大廣社

津田塾大学校舎。小平市に移転したのは、梅子の死後、1932年。校舎は当時の面影をそのまま留める。

現津田塾大学の創立者津田梅子、牛込南町で生まれる。

梅子の墓。津田塾構内の一画である。

玉川上水は小平秀景26の一つ。